

# のぼりつくして石ほとけ

川棚温泉の守護神青龍を祀る松尾神社の参道にお  
わす石の仏さま。尊顔に、なかば陽を浴びていた。  
無量の慈悲を山頭火も感じただろうか。



おそらく山頭火が日々、往来したであろう旅館街。撮影中、通りかかった古賀アサエさんが教えてくれた。「昔は川棚にも30軒ほど湯治宿があり、芸者衆もようけおってねえ。私は下手な俳句を温泉まつりに投句したりして、山頭火を偲んじよります」。古賀さん作、2009年あの「山頭火も愛した川棚温泉俳句コンテスト」特別賞受賞句は〈淡々と生きたき余生落葉ふむ〉

# 涌いてあふれる中にねている

川棚グランドホテルの大浴場「山頭火」の壁には山頭火俳句が多数記され、入浴しながら楽しめる。「山頭火は、当地の人を選ばないなめらかな湯質がお気に入りだったようです」とは同館専務・岡本浩明さん。掲出句はかつての共同湯で詠んだものだろう。他に川棚での「温泉句」としては〈つかれた脚を湯が待ってゐた〉〈はだかしたしくはだかをむける〉など。





## 大楠の枝から枝へ青あらし

天然記念物のクスの森。樹齢約1000年、幹周り約11m、高さ約25m。1本で森の様相を呈する。さしもの自由律男も素材に圧倒されて、この句は「定型化」してしまったか？ 温泉街から車で約10分。

妙青寺34代目住職の西田隆志さん。日本の現状を憂える話の中で、「いなくなって初めてわかることもあるいねえ。山頭火は今の日本にこそ必要な人やなかろうか」と。まさにいつでも心を開けている気さくな口ぶりだ。



妙青寺門前右手には、山頭火が自炊滞在したかつての木賃宿「桜屋」がある。ご主人の木下仁さん（左から2番目）は山頭火について伝え聞いていた。「行乞から帰ると、隣の『上湯』（かみゆ）でひとつ風呂浴びて、投げ銭で買った焼酎をうちのじいちゃんに呑んじゃったそうです」。右端は取材者。

## もう山門は開けてある

山頭火がその寺領を借りたいと切願した龍福山妙青寺の山門。（花いばら〜）の句とつながる（この土とならうお寺のふくろう）も詠んだ。応永23年（1416）、大内持盛が建立。雪舟庭や梅園がある。境内に建つ句碑は（涌いてあふれる中にねている）。



吉岡功治（よしおか・こうじ）

1950年、熊本県生まれ。東京総合写真専門学校芸術学科卒業。「天台宗修験道大先達」の資格をもつ異色の写真家。1992年、写真集『光の記憶・筑豊』（IPC）で日本写真協会新人賞受賞。『山界曼陀羅』（新潮社）、『山頭火と歩く』（村上護氏と共著、同）、『秩父遍歴』（埼玉新聞社）、『遍路の風景』（共著、四国4新聞社合同出版）、『生命の森 菊池溪谷』『くまもと人の顔』（以上、創造舎）など写真集多数。「山頭火の魅力は、自己への執着と俳人として生き続ける苦悩を背負いながらも、無邪気で透明感のある心の持ち主であること」と語る。現在、球磨地方の川辺川撮影に取り組んでいる。日本写真協会会員。